

## 上郷深田遺跡の試掘調査現地説明会参加記

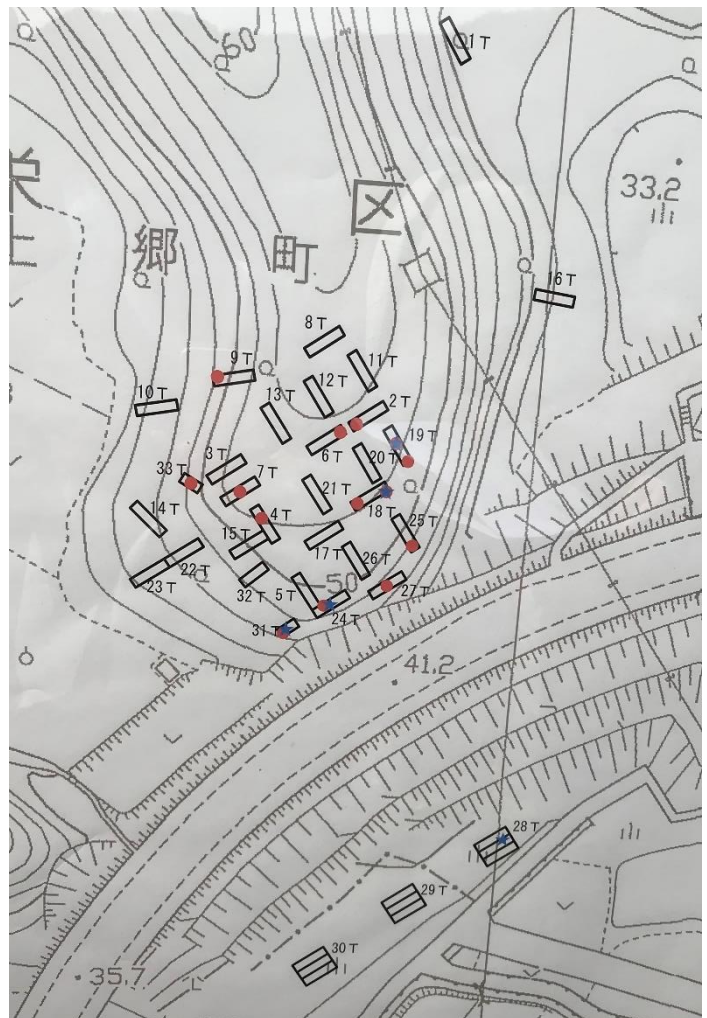
2019年3月16日（土）に開催された、横浜市栄区上郷深田遺跡の試掘調査現地説明会に行ってきました。晴天に恵まれ、現地には午前午後合わせて220人以上の見学者が詰めかけて、関心の高さがうかがえました。近隣住民、瀬上池を守る会、上郷深田遺跡を守る会などの方々を中心のようでした。神奈川県歴教協会会員も午前中に少なくとも2人、午後にも私を含め2人が訪れました。

調査に当たった横浜市埋蔵文化財センターの橋本研究員による説明は10分間程度で、1986年の調査で判明している遺跡の概要と、今回の試掘調査で発見された遺構や遺物の解説でした。

現地と言っても、試掘調査が主に行われた道路北側の30本のトレンチについては、斜面で一般人の立ち入りは危険であるという理由から見学は許されず、遺構の中心地から離れた道路南側の3本のトレンチだけがわずかに公開されました。そのような物足りない印象の説明会ではありましたが、この試掘で多くの遺構や遺物が発見されていることは明らかで、その意義の大きさは十分にうかがえました。



公開された30号トレンチ  
湧水をポンプで排水しながら調査



トレンチ配置図 赤い印は遺構、青い印は遺物出土を示す

現地で展示された遺物は、壺形の須恵器の頸部、数片の須恵器・土師器片、そして製鉄炉の壁体3点と、製鉄の過程で排出された鉄滓が4点でした。土器類はその形状から、すべて7世紀代のものであるという説明でした。また炉壁や鉄滓も、おそらく土器と同時期と考えられるということで、7世紀後半から約200年間継続したと言われる上郷深田遺跡の、初期の頃に属するものと思われます。



出土した土器類

炉壁が発見されたということは、1986年の発掘調査の範囲外にも製鉄炉が存在したことを示します。つまり深田遺跡は、従来の調査で判明している範囲より、更に広がりのある大きな遺跡だということです。発掘調査担当者の橋本さんに、「すごい発見ですね、製鉄炉は全部掘り出したらどのくらいあるのでしょうか？前回の調査で判明しているのが16基ですから、今回の試掘を基に本調査をしたら、全部で30基くらいになりますか？」と質問をぶつけてみました。すると、「そうですね、あるいはそのくらいになるかも…」とあくまで慎重な言葉を選びながら、橋本さんの表情は嬉しそうに見えました。

壁体は粘土に植物繊維などをまぜて補強したもので作られていました。そのため壁体の外側は繊維状のもの痕跡が見えているようでしたが、内側は高熱のために溶けてガスが噴き出したような穴が開いていました。鉄滓は持つとずっしりと重く、滓と言いつついながらまだかなりの鉄分を含んでいるように思えました。磁石を持ってくればよかったと思うほどでした。遺物に直接触れて感触を確かめられたのは、今回現地説明会に足を運んだことの醍醐味でした。これが深田の製鉄炉から出てきた鉄滓かと思うと、なんとも言えない感動が湧いてきました。



炉の壁体（外側面）



炉の壁体（内側面）

31 トレンチより



鉄滓、上の2点は特に重い

今回の試掘調査で、東京都と神奈川県下で唯一の古代製鉄場遺跡である上郷深田遺跡の重要性は、一層深まったと思います。東急建設による開発は避けられないとしても、できるだけ丁寧な本調査と、その後の研究成果の公表と活用が望まれると思います。

(神奈川県歴教協会 小宮まゆみ)